
おまもりやどり

虎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまもりやどり

【Nコード】

N5990Y

【作者名】

虎太郎

【あらすじ】

神社のお御籤で大凶を引いてしまった不幸な少年、石動 宗一郎。

彼は神主に唆され、3000円のお守りを購入してしまう。

翌朝、彼のお守りに宿っていたのはなんと生まれたばかりの神様「天之子之命」だった――。

身長10cmの小さな神様が生み出す、ハートフルはちゃめちゃストーリー。

神道バカの虎太郎がお送りする、二作目の神様シリーズ。
250人中、7位に入選した優秀作品です。
どうぞ、ご覧下さいませ。

壱 『不幸は突然にやってくる』（前書き）

この作品は「15000文字以内」というお題で作られた作品です。

初めて虎太郎の作品をご覧になる方も、二度目になる方も、どうぞ、ごゆるりと神様ストーリーを堪能くださいませ。

（タイトルを見て「おまもり。まりじゃねえか！」と思われた方もぜひ一度、ご覧下さいませ）

壱 『不幸は突然にやってくる』

物事はいつだって、こつちの事情など関係なく訪れる。

そして不幸は突然やってくるのだ。

気晴らしに天ヶ先神社あまがさきじんじやに立ち寄って、気まぐれにお御籤みくじを引いた。ただ普通に、何気ない一日を過ごしていただけなのだ。

「——何だ、コレは」

思えばこのとき、お御籤で大凶を引いてしまったこと自体が、これから続く不幸の始まりだったのかも知れない。

手の中にある紙切れから禍々まがまがしいモノが煙のように立ち上っているようだった。もつとも、その神様からの不幸なお告げを引いてしまった不幸な少年、石動宗一郎いさぶねむねいちろうに靈感などあるはずもなく、それが目に見えたわけではない。

大凶——お御籤の中で最も悪いとされるお告げ、運勢のびりつけつ。大凶という禍々しい文字の隣には、可愛らしい花柄に囲まれて「あなたの花は黒百合くろゆりです」と書かれていた。

さらに隣には花言葉が。恐る恐る目線を横へと移す。

……ちよつと待て、黒百合の花言葉は？ 呪い？ じゃないか！

何でそんな不幸な花を載せてあるんだ。

やんわりと彩いろどられている花柄でさえ恨めしく思えてくる。

『【運勢】大凶——夢も希望ありません。努力をすればする程、底無し沼にはまったかのように深い闇に沈んでいきます。ここはひとまず落ち着いて行動をして、良い運氣が流れてくるよう待ちましょう』

逡巡しゆんじゆんの迷いなく手の中で紙クズ同然に握りつぶすと、お社やしろを背にして力の限り投げ捨てた。丸められたお御籤は弧を描いて、町の景色が広がる階段のむこうへと消えていく。

ざまあみる。

ふん、と鼻息を荒げて神社を後にしようと、お御籤が消えていった階段へと足を踏み出した。

突然、足元がぐらりと揺れ、大きくバランスを崩す。自分の足の裏に大きな石があり、気づかず足に乗せてしまったときには、既に階段が目の前に迫っていた。

地面と空とが繰り返して視界に入ってくる。同時に全身に痛みが走る。

世界が八度ほど回った後、階段下の石畳へ背中を打ちつけてようやく止まった。

頭に浮かんだのは大凶の二文字。むしゃくしゃして、頭を掻きむしる。栗色の髪が宗一郎の心境を表しているかのように、乱暴な形になる。

「おやおや、どうなされました」

天を仰ぐ宗一郎の目の前にクシャクシャのお御籤を手にした、白い着物の男が覗き込んできた。

「ははあ、それはまた災難でしたねえ……」

あらかた説明をし終えたと、この神社の神主だかんぬしと名乗る男は微笑みながら何かを差し出してきた。

神主の手の上には、赤や白の紐が幾重いくえにも編み込まれたお守りらしきものがあつた。

「お守り……です、か？」

「その通りですな。ただし、その社務所つむじょで売っているような代物じゃあないですがね」

神主は宗一郎へ顔を近づけると、にたあと笑いながらお守りを目線の高さまで持っていく。

「このお守りは代々、この神社に伝わる特別な祈禱を経て作られたお守りでしてねえ」

と、神主はお守りの紐を摘むと、振り子のように動かす。

「開運なんてモンじゃあないですよ。なんせ悪霊を払うための強力な護符こふなんですから。だから大凶なんて出ても、これを持てれば関係ないですよねえ」

思わず生唾を飲み込んでしまう。喉から手が出る、というのはこの事だろう。

今まさに、揺れ動くソレを掴み取ろうと右手に力が入っているのだから。

「——一万円」

「……高いッ」

「の所なんです、見たところ学生さんですよね？」

よれよれのズボンに大きくはみ出している白地の半袖シャツ。胸ポケットには宗一郎が通っている桜花学園おうかを示すバッチバッチが煌々くわくわと輝いている。

虚を衝かれて押し黙っている宗一郎を気にも留めず、神主は続けた。

「学割っていうのかな？　それで大まけのおまけ、三千円つてのはどうかねえ？」

「たか——」

「これ以上は割引できませんなあ。それに……いらないうらいんですよ」

神主は急に興味を失ったかのように、社務所へと踵きびすを返そうとする。

階段へ足をかけた所で、宗一郎の右手が神主の袴はかまを掴んだ。

「買っ、買っよ！」

冷めた神主の眼に光が戻る。先程の態度が嘘のように微笑んだ。

「毎度ありい」

宗一郎の背中を見送る神主に、一人の巫女が近づいた。

「神主様」

「——なんでしょう」

「また、お御籤の中身を替えましたね？」

「——はて？」

「また、お守りを不当な価格で売り払いましたね？」

「——はて？」

「あれ、安産祈願のお守りですね？ 七百円の」

「——ええ。でも、ちゃんと中の紙を入れ替えたのでいいじゃないですか」

「神主様——！！」

その夜、宗一郎は買ったお守りをジッと見つめていた。

お守りを何処どこにつけようか悩んでいたが、やはり一番身近にある携帯電話に結わいつけた。

うん、何だか頼もしく見える。

宗一郎は目覚まし時計のアラームをセットして、携帯電話を枕元に置いた。

きっと明日には平穏な日常が戻っているに違いない。そう祈って宗一郎はゆっくりと瞼まぶたを閉じた。

壱 『不幸は突然にやってくる』 （後書き）

階段を転げ落ち、さらには神主には誑たがひかされた宗一郎。

不幸続きの少年は、平穩が訪れるようにと、その胸に希望を抱き、眠りにつく。

翌朝、彼はその願いが永遠に叶わぬ夢だということに気づかされるのだった――

次回 『神様も突然にやってくる』

どうぞ、ご期待あれ。

式 『神様も突然にやってくる』

宗一郎は毎日けたたましい目覚まし時計の電子音で起きていたが、その日は珍しくアラームの時刻よりも早く起きた。

「く……ああ」

深い眠りに入っていたのか、一度も起きることがなかったため目覚めは良好だ。

大きく背伸びをして枕元にある携帯へと手を伸ばしたとき、ふと可愛らしいものが宗一郎の目に入った。

「ん、くう」

携帯電話の大きさと同じくらい、もしくは一回り小さいくらいの女の子だった。

それが携帯電話の上で猫のように丸まっており、静かに寝息をたてていた。

白い着物に足首まで覆われた赤の袴……いわゆる巫女装束みこしょうぞくというやつだろうか。

髪は縮こまった身体と同じくらいまで伸びており、烏の濡羽色からすぬればいろが水の上で揺らめくように、白い携帯電話の上に広がっている。

「んう」

初め、宗一郎はそれが人形か何かだと思った。

手のひらに納まるくらい小さな人間など、いないからだ。

しかし微かに上下する胸が『生きています』と語っていた。

その光景に呆然ぼうぜんとしていたが、寝返りをうつ少女を見ると、胸の奥が妙にくすぐったくなった。

宗一郎は己が心の思うままに、右の人差し指で少女の頬ほおを突く。

感触は——とても柔らかかった。

女の子の身体は電気が走ったかのようにビクンと震えると、先程より一層縮ここみちみまってしまう。

その仕草を目の当たりにし、小さい頃ハムスターを突いたときに

感じた、言い知れない感情が宗一郎の胸中に広がる。

さらに二回、突いた。

「く……うう」

四回ほど突いたあたりで、少女の額に筋が浮かび上がる。

それに気づかないまま宗一郎はもう一度指を近づけ——絶叫した。

「いつつてえー!!」

慌てて指を引つ込めると、携帯電話の上で犬のように唸る少女の姿があった。

痛む指を見ると、小さな歯形がついていた。

「痛いのはこっちのほうさ。酷いね、人が気持ちよく眠っているのに、不埒だよ」

自らの袖で下半身を庇い、小悪魔のような笑みを浮かべた。

着物が弛んで胸元が露になった姿は、普通、健全な男子にとって目に毒な光景である。

が、目の前の少女は小さすぎる上に胸が板であるため、虫眼鏡でも持ってこないと色気の欠片さえ感じられない。

「いや……そもそもお前、誰なんだよ。しかも人の携帯の上で……なにしてんだ」

「ん？ 『けーたい』……」

およそ重力というものを感じさせないような身のこなしで、ふわりと浮き上がるように少女は立ち上がる。

「これかい？ 『けーたい』というのは」

青竹踏みのように、何度も携帯電話を乱暴に踏み荒す。

「あ」

すると、少女の足元から光が現れ、携帯電話を照らした。

光の泉、と言えはいいのだろうか。白き光源が少女の両足の間で明滅している。

携帯電話の光ではない。

きれいだなあ、と思った矢先、何かの弾ける音が携帯電話から発せられた。

先程まで眩しかった光も、急速に失われる。

「やつちやつたみたいだ」

ばつが悪そうに、少女は宗一郎を見上げてそう言った。

背中にひやりとしたものを感じた宗一郎は、少女が携帯電話の上に乗っているにも関わらず、携帯電話を開いた。

ディスプレイの向こうで「おわっ」と悲鳴ひめいを上げて落ちてしまう少女。

その悲劇ひげきに眼もくれず、宗一郎は目の前の惨劇さんげきに大声を上げた。

「うわあああ！ 携帯が……」

液晶画面に無数のひび割れ線が走っており、電源ボタンを押しても反応はなかった。

ディスプレイのてっぺんから、申し訳なさそうに少女は顔を覗のぞかせた。

「ご、ごめんよ。つい力が……」

「力ってお前、一体何者だよ！」

「か——神だ」

式 『神様も突然にやってくる』（後書き）

宗一郎の願っていた平穏な日常は、ただ一人の少女によって打ち砕かれた。

体長10cm、黒髪ロングヘアに巫女装束。
自称神様のこの少女は、いったい――

次回『天之子之命』

どうぞ、ご期待あれ。

参 『天之子之命』前編

「あゝあ、本当に壊れちゃったよ」

学校へ向かうため電車を降りて、宗一郎は大通りを歩いていて、周りには多くの会社員やら学生やらがそれぞれの目的地へと向かっている。その中に宗一郎もいた。

「うう、謝ったじゃないか——キミも意地悪いじわるだなあ、いい加減許しておくれよ」

携帯電話の上で少女——もとい神様が、正座のまま縮こまっていた。

「それで……ええと、なんだっけ。名前」

「一天之子之命《あまのしのみこと》」

「そうそう、あまの……何だっけ」

「天之、子之、命！ 遠回しに人を虐めるいじのが好きみたいだね、キミは」

宗一郎の目の前で頬を膨らます自称『神』の少女、天之子之命。

「それで……アマノ、シノ、ミコト？ それ以外は何も分からないのか」

「……うん、残念ながら。僕は神と言ったけど、神階しんかいは下しもの下。キミたちが思い浮かべるような、全知全能ぜんちぜんのうの存在じゃないんだ」

発現はつげんしたばかり——そう彼女は言った。

携帯電話が壊れた後の……今朝の出来事を宗一郎は思い返した。

・・・

「何故なぜ、ここにいらっしゃるんだろうね」

自らを神と名乗った少女は、不思議そうに宗一郎へ聞いた。

「僕は、神具しんぐとして祀まつられている刀に宿るべきだったんだけど——何故、僕はここにいるんだい」

お守りの上で、まっすぐに宗一郎を見上げる天之子之命。少しだけ焦りの色が見えた。

「僕はそこに宿^{神具}らなければならんだ。ねえ、どうすればいいのかな」

「どうすればって……」

宗一郎はわけが解らなかった。朝起きたら小さな少女が寝ていて、触ったら噛み付かれて、携帯電話は壊されて、あげくの果てにどうすればいいかときたのだから。

「じゃあそこに行けばいいじゃないか。その、宿るべきシング？へ」

「行けたら苦労はしないんだけどね」

見ててよ、とお守りの上で歩き出そうとする天之子之命。お守りから十センチほど離れたかと思うと、天之子之命の眼前でバチバチと火花が散った。

見えない何かに阻まれたのか数歩下がり、肩をすくめる。

「ほらね。これ以上はお守りから離れられないんだ」

「どうして、なんだ？ どうして離れられないんだよ」

「恐らく、なんだけど……」

顎に手をあてがい、うーんと考える。

「……誤^{あやま}って宿^{あやま}ってしまったみたいなんだ。このお守りに、ね」
どこか諦めた口調で、天之子之命は足元のお守りを指した。

参 『天之子之命』前編（後書き）

手違いによってお守りへ宿ってしまったという神様『天之子之命』。

生まれたばかりの彼女は、自らの境遇に戸惑っていた。そんな彼女を見越し、宗一郎は何気なく話題を変えていく。

そして彼女は、新たな名前を与えられるのだった――

次回『天之子之命』後編

どうぞ、ご期待あれ。

肆 『天之子之命』後編

「しかし、天之子之命って言いにくいな」

あまりにも落ち込んでいる天之子之命を見かねて、話題を変えるよう宗一郎は心がけた。

神様に気をつかうというのも変な話だ。

「天は空という意味で、高天原の一字を貰い受けたんだ。子は、その高天原で生まれた神を表すとして付けてもらった——僕は嫌いやあないな」

「じゃあ天は御天道様の天で、子は子供の子か？」

「うん。命は生命の命だけど、神を呼ぶときにはわざと抜く場合もあるんだ。言いにくいなら命を抜いてもらってもいいよ」

「じゃあ……天子ってのはどうだ？ ……無理やり天って読まなくていいだろ、別に」

口にした後、少し馴れ馴れしいことをしたなと宗一郎は思った。

まるで俺が彼女をあだ名で呼びたいみたいじゃないか。

そんな宗一郎の思いとは裏腹に、彼女は携帯電話の上でキラキラと瞳を輝かせていた。

「てんし……天子。ふふ、良い響きだね」

どうやら気に入った様子で、何度も頷いては「天子」と名前を確認するように自分に言い聞かせていた。

「どうやら、キミからも良い名を貰ってしまったね。嬉しいよ」
てへへ。気恥ずかしいのか、頬を掻く天子。

「そつえば、天子……本当に見えてないんだな、他の奴らに」
ふと、宗一郎は辺りを見回した。

大通りを行きかう誰しもが、前を向いて歩いている。

時折、宗一郎と目が合う通行人もいるが、すぐに視線を戻してしまふ。

誰一人として、携帯電話の上に座っている天子に、気づかなかっ

ただ。

「ほら、僕も一応は神だからね。人間に神が見える必要はないから、始めから見えないようになってるのさ。キミの場合は——多分、これのおかげかな？」

歩く振動でゆれるお守りを指差す。

「また、お守りか」

「そう、そもそもコレが空っぽなのが、おかしいんだ」

ちよこんと正座をしたまま、天子は説明を始めた。

「もともお守りには加護の力が宿っているんだ。その力は微弱ではあるけれど、多少の悪霊や、それらがもたらす……いわゆる不幸な出来事から守ってくれるんだよ」

指を遊ばせながら、天子はすらすらと説明する。

その姿は神様というよりも神道好きの巫女さんだった。

「だけどね、このお守り……宿ってみて気づいたんだけど、中は空っぽ——空洞だったんだ。こんなの、ただの飾りよりも厄介だよ。僕が宿らなかつたら、最悪、悪霊が入っていたかも知れないから」

平然と恐ろしいことを言うてのける小さな神様。

「よっぽど適当に作ったのか、それとも神様なんていないと思ってる人が作ったのかな。これ売ってた神社には、近づかないほうがいいよ」

「はい、神様」

「なんだい、急に？　せつかくキミが付けてくれた名前があるんだ、そっちで呼んでおくれよ。て、天子——ってさ」

へへへ、と照れ笑いをする天子。

こいつは想像以上に馴れ馴れしいな、と宗一郎は思っていた。

肆 『天之子之命』後編（後書き）

宗一郎から貰った名前を、嬉しそうにかみ締める『天之子之命』こと『天子』。

しばしの時を共に過ごす中で、天子は少しずつ常識を覚えていく。そして、天子は問い詰めてしまう。彼と、彼の周りのことを――

次回『神様、トモダチって何だ？』
どうぞ、ご期待あれ。

伍 『神様、トモダチって何だ？』

——神様がお守りに宿って三週間。

どうやら神様はテレビが大層のお気に入りようで、暇さえあればテレビの観賞^{かんしょう}を催促^{さいそく}するようになった。

お守りから遠くへ離れられないため、一人でリモコンを操作することも敵わない天子。

必然的に、宗一郎がいなければテレビを見られない。

なんで無理矢理テレビを見なきゃいけないんだ。

宗一郎は「面倒」の一点張りで拒み続けた。

始めのうちは、ぶーぶーと文句を言うだけの天子だったが、最後には「リモコンを言霊に代えて携帯電話の中に宿らせよう」と言い始めた。

宗一郎は携帯電話を壊された一件を思い出し「天子ならまた壊しかねない」と頭に過ぎった。そのため、天子と一緒になくなくとテレビを見るハメになってしまった。

「ねえ、キミ」

「何だよ」

天子はテレビに釘づけだった。映されているのは、昨シーズン人気を博した学園ものの青春ドラマだ。男同士の深い友情を描いた作品らしい。

再放送が決定したらしく、たまたまテレビをつけたら一、二話が放映されていた。

宗一郎はあまり好きではなかったが、天子が見たがっていたので一緒に見ることにした。

天子は、後ろに座る宗一郎へ問いかける。

「トモダチって何か、わかるかい？」

小さな口に入るよう、細かく砕いたポテトチップスをほお張りながら、天子は答えを待つ。

「――動物で例えると群れ、だ」

「動物は自分たちを脅かす存在を恐れて、群れをなすものじゃないか。じゃあ、人間たちは何を恐れて群れているんだい？」

天子のその知識は先日、社会科の先生が授業中に語っていた内容だった。

誰も聞いてなかったのに、聞いていたんだな。俺と同じで。

宗一郎は苦笑し、口を開く。

「多分、それは『孤独』を恐れているんだと思う。人間は寂しがり屋なのさ、一人でいると寂しくて死んじゃうんだよ」

「ふうん……じゃあ、キミは寂しくないのかい？」

ぴくり、と宗一郎の肩が跳ねる。胸に針が刺さったかのように、心が痛む。

風呂やトイレといった場所を除いては、常に天子と一緒に過ごしていた。

修理から戻ってきた携帯電話に、お守りをつけたからだ。

だから学校も例外ではない。

そのため、天子は気になったのだろう。

ドラマの中では主人公と友人がいつも教室内でふざけあい、笑いあっている。

その光景を、天子は宗一郎の身近で見たことがないからだ。

宗一郎には、そう言った友達がいなかった。

男女共に入り乱れて騒ぎあう教室の中で、彼は一人だった。

いつも宗一郎は窓際で景色を眺め、そんな彼をみる天子。それが二人の学校生活だった。

「寂しくない」

ポテトチップスを咀嚼する音だけが、耳の奥で空しく響く。

「そっか。僕は、寂しいと思っちゃうかな」

手についたポテトチップスをペロリと舐めると、天子は振り返った。

「僕は一人だと寂しい。キミがいつも一緒にいてくれるから、今は

寂しくはない、かな」

テレビはちょうどコマーシャルに入ったようで、天子はグーツと背伸びをすると、身体も宗一郎へ向きなおした。

「きつと……宿るべきはずの神具カに宿っていたとしたら、僕は寂しかったと思うよ。一人で永遠に、誰とも言葉を交わすことなく、人々の信仰しんこうを受け続けるんだ」

淡々と天子は語る。

今、俺が聞いている言葉は神様の——天子の本音だろうか。

「でも、それが神なんだよね——ああ、僕は幸せ者だなあ。こうして毎日、キミと楽しく過ごせているのだから」

曇り一つない笑顔を向けられた宗一郎は、あることに気づいた。

そうか。天子と自分は似たもの同士だったのだ、と。

友達が——心を許しあえる人がいなかった。

なんだか急に胸がくすぐつたくなる。

それは、自らが友達みずかというものを遠ざけていた宗一郎が、初めて抱いた感情であった。

伍 『神様、トモダチって何だ？』（後書き）

お守りに縛られ、籠の鳥同然の天子は言う。「僕は幸せ者だ」と。
その言葉に戸惑いを覚える宗一郎だが、同時に彼の中で不思議な
感情が沸き上がる。

言い知れぬ感情が彼の心に纏わりつく。そして彼は思い出してし
まう。その感情の正体に――

次回『おまえと出会って』
どうぞ、ご期待あれ。

陸 『おまえと出会って』

「お前なら出来るだろ。何でもつと頑張んねんだよ！」

それは遠い昔の記憶。

聞きなれた、とても懐かしい声だ。

「うるせえなあ……他人のくせにいちいち口出すなよ」

これは、自分の声。

「なんだよそれ。俺はお前に頑張ってもらおうとだな——」

「いちいちうつとうしいんだよ。何だお前、俺が何しようと勝手だろっ」

「はあ！？ 宗一郎——てめえ、そんな自分勝手な奴だったのかよ

……マジがっかりしたわ」

何が原因で口論したのかは覚えていない。

ただ、あのときは自分のことを何も解ってないんだと、この友人を突っ撥ねてしまった。

「勝手にしろ」

自分のことをたいして知らない他人に、とやかく言われるのはうつとうしかった。

この頃から宗一郎は人を遠ざけていた。

だが、次第に宗一郎の胸には言い表せない感覚が宿り始めた。

まるで燃料タンクに穴が開いているかのように、自分の心から大切な何かが漏れている気分だった。

それを、ただの気のせいだと宗一郎は自分を騙し続けた。

本当は自分のことを解ってくれる友人が欲しいという、心の声から逃げていただけなのに。

ああ——くそ、胸糞悪い。

そして、宗一郎の思考が加速する。眠りから覚めるのに、そう時間がかからなかった。

...

急速^{きゆうそく}に意識^{かくせい}が覚醒した宗一郎は、自らの部屋……ベッドの上で目をさました。

——何で今さら思い出すんだ。

大きくため息をついて、寝返りをうつとした。腕を投げ出して縮こまるうとしたとき、視界の端に携帯電話——天子が映る。

しまった。

宗一郎は右腕に渾身^{こんしん}の力を入れ、天子の数センチ上で見事に停止させた。

ムリに力を入れてしまったために痛む右腕をさすりながら、携帯電話の上で眠る天子を見つめる。

ピクン、と身体を震わせては寝返りをうつつ小さな神様。

微かな衣擦れの音が宗一郎の耳に届く。

「こんなやつがいなければ、悠々^{ゆうゆう}と両手を広げて寝れるってのになあ」

神様でも、一人は寂しいらしい。

初めて会った日の夜のこと。宗一郎は気をつかい、他の部屋で寝ようとしたのだが「神様は寝ないんだ。だからキミの隣で悪霊から守ってあげるよ」と言い出した。

だが天子は、宗一郎よりも早く眠りに就^ついてしまった。

本当に悪霊が退治出来るのかと思い、試しに『恐怖の心霊映像——百連発！』を見せたら「怖くて一人じゃあ眠れないんだ、僕と一緒に寝てくれ」と泣きついてきた。

今まで……家族以外の他人とこんなに長い時間を、共にしたことなんてなかった。

冷え切っていた何かが、天子という神様と出会ったことによつて温められ、満たされてくのを感^{かん}じた。

もしかしたら、自分は天子のことが——なんて、宗一郎は考えてしまう。

いや、違う。違うんだ。

宗一郎はかぶりを振る。

きつと、いつか天子も本来いるべき所に戻るんだ。

そうしたら、またいつもの日常が帰ってくる。

しかし、宗一郎の胸には今まで感じたことのない、焼けるような痛みが宿った。

天子——これもお前と一緒にいたせいなのか……？

気持ちよさそうに寝息をたてる天子を見て、宗一郎は瞼を下ろした。

陸 『おまえと出会って』（後書き）

傍らに眠る神様は、何も知らない。

自身が夢の中を彷徨っているときに、心を痛める少年の存在を。

二人の間に聳え立つ、暗黙の了解。それは人間と神様という、途方もない壁だった――

次回『ハハハ、ハハ』前編
どうぞ、ご期待あれ。

漆 『八八八、八八』 前編

「そんなにムスツとしないでくれよ。そんなんじゃ、本当に悪い気が迷い込んでしまおうよ」

「うつさいよ」

週があけて月曜日となった。

少し早めの時間に家を出たため、大通りを歩く人の数が少ないように宗一郎は感じた。

しかし、それよりも気になっているのは、今朝の天子とのやりとりだった。

・・・

朝のニュース番組『おはようどうでしょう』。番組のコーナーの一つである星座占いで今日の宗一郎の運勢は最下位だった。

「へえ、中々面白いね、占いつて」

そこに食いついてきたのが、天子だ。

「ちよつと僕も、占いつてヤツをやってみようかな」

その後、テレビに向かつて差し出した天子の手から眩い光が放たれ、目を開けてみると、居間のテレビは忽然と姿を消していた。

天子いわく、今日一日のテレビの存在を明日に送ってしまったとか。

つまり天子は「今日運勢が悪いのなら、その存在と結果を明日に送ってしまえばいい」と思ったらしい。

テレビを飛ばしても今日の運勢は変わらないわけで、出来れば占い師かテレビ局を明日に送ってほしかった。もつとも、それが本当に行われていたら、大惨事ではあるが。

・・・

登校を急ぐ宗一郎の手のひらの上で、携帯電話に腰かけ小悪魔のように笑う天子を見て、宗一郎はふと、昨日の疑問を口にすることにした。

「なあ、天子」

「なんだい？」

「その、本来宿るべき場所——神具に宿る方法が解つたら、どうするんだ」

それを口にしないことは、いつのまにか二人の間では暗黙のルールとなっていた。

初めこそ間違つて宿つてしまい、動揺していた天子だが、今では神具に返ろうとしている様子が全く見られない。

でも、彼女は神様だ。個人の感情を優先することよりも、信仰を集め、人々を平等に守らなければならないという責務がある。

本心と責務。

きっとその二つが、天子の小さな身体の中でせめぎあっているのだろう。

しかし、このまま有耶無耶にしてズルズルと月日を重ねるのは、宗一郎にとつては辛かった。

朝、目覚めたら唐突に天子がいなくなっていた、なんてことはごめんだった。

かといって、天子が本来宿るべき刀へ宿るといふのなら、それは神の義務であり、彼女の意味でもある。

一介の人間である宗一郎に、彼女を引き止めることなどできない。だから宗一郎は、天子の本当の気持ちを知りたかった。

「僕は——、僕は神様だ」

その言葉を聞いた瞬間、宗一郎の身体は石のように重く、硬くなつてしまった。

期待していた何かが、どうしようもないものだと知ってしまった。邪魔だなあ。そんな眼を向けられながら、両脇を人がすり抜けて

いく。

川の流れを塞ぐ岩のように、彼は動かない。

宗一郎の頭の中は言い知れない不安、恐怖が暴れまわっていた。そうだ、彼女は神様なのだ。

人間が神様を愛する？ 人間風情が？

おこがましいな。

熱を持っていた宗一郎の胸が、徐々に冷めていく。

それとは対照的に、着物の袖をもじもじとさせて、上目遣いで宗一郎を見上げる天子。

「でも、でもね。僕は、キミのことが……」

一生懸命伝えようとして口を開くが、それでも、言葉を選んでいくような顔だった。

そんな天子の双眸の奥に隠れた、黒い瞳孔が動き出した。可愛らしい表情に、刀のような鋭さが混じる。

「うわ……何あれ」「落ちるぞおー!!」

周りを歩く数人が、ビルの建設現場の上に向かい叫んでいた――

漆 『ハハハ、ハハ』 前編（後書き）

神様と人間。

交わることのない二つの存在が胸襟を開いたとき、彼らの上から
降り注ぐ一つの答え――

次回『ハハハ、ハハ』 中編
どうぞ、ご期待あれ。

捌 『八八八、八八』 中編

ふおん。

空を見上げると、自分の何十倍もの大きさをした鉄骨が、宗一郎に向かって一直線に落ちてくる。

「逃げて！」

天子の声で我に返ると、鉄骨は宗一郎の目前まで迫っていた。

動けない。あまりの現実離れした出来事に、宗一郎の足は動かなかった。

「間に合え——！！」

天子は空へと両手をかざした。

一瞬にして周囲が灰色へと塗り変わる。

鉄骨と共に落ちてくる砂埃が停止ボタンを押したかのように静止する。

動くもの全ては景色に縫い付けられた。

だが、鉄骨は落下をやめない。

天子は眉をひそめると、何かの印を描いた。

宗一郎の頭上に、水のような波紋が広がっていく。バリア、というやつだろうか。

「ふ——ぐうううっ——！！」

鉄骨と波紋とが衝突する。広がる波紋が揺らぎ、耳をつんざくような破碎音が響き、足元のアスファルトはひび割れていく。

「はは…… やってくれるなあ。えらい神もいたもんだね」

天子を見やると、少し辛そうに、口元を歪めていた。

「神……？」

「キミ、まさかとは思うけど…… このお守りを買った神社で、何か罰当たりなことしたかい？ 例えば——鳥居に小水をかけたとか」

「バ、バカ！ そんなことするわけないだろ。ただ、お御籤を引いたら大凶が出て、カツとなって捨てた……」

「ハハ、神の有難いお告げを捨てるなんて——でもさ、流石にこれは少しやり過ぎなんじゃないかなあ——！」

ググ、と少しだけ鉄骨が押し戻されていく。それに連れて、天子は口調を荒げた。

「いいかい？ 人間がお告げを捨てたからってさ、神だって、やっていいことと、やっちゃいけないことがあるのさ！ でもね、人間も悪いんだよ」

チラリと宗一郎を見やる。

「人間はさ、大して信仰もしないくせに、いざとなったら神頼みするんだ。ひどいと思わないかい？」

天子の言葉を聞いて、宗一郎は何も言えなかった。

なんで守ってくれないんだ、神様の嘔吐き。

そうやって悪いことにあたると、いつも神様のせいにしてきた。

そのくせ、自分ではどうにもならないことが起きると、決まって神様に救いを求める。

まさに、宗一郎自身ではないか。

「でも、僕は人間が好きだ！ 例え罰当たりな行為を犯したとしても、無慈悲に殺そうとする神なんて、僕はなりたくもない——！」

天子はまっすぐな瞳で、鉄骨へと訴えかけている。

もしかしたら彼女は、自分が罰当たりをした天ヶ先神社の神様と話しているのか。

宗一郎は天子が睨んでいる方へと視線を向ける。

もしあそこに神様がいるとするならば、自分の声も聞こえるかも知れない——

捌 『ハハハ、ハハ』 中編（後書き）

宗一郎は、自らの行いで天罰を招いてしまった。しかし、傍らで叫ぶ神は、天罰に抗おうとする。神と神がぶつかり合うとき、無力な人間の宗一郎にできることは、ただ一つだった――

次回『ハハハ、ハハ』 後編
どうぞ、ご期待あれ。

玖 『八八八、八八』 後編

「あ、あのさ！」

激しくぶつかり合う鉄骨と波紋の轟音で、宗一郎の声は今にも掻き消えそうだった。

それでも、宗一郎は腹に力を入れる。

「俺、誤解してた！ 神様って、いつも気まぐれにしか助けくれないと思ってた、肝心なときに守ってくれない意地悪なヤツだと思ってた」

「キミ……」

「でも、今は違う。天子と出会ってから、こんな神様もいるんだって、気づいたんだ。その、本当に——申し訳ございませんでしたあ！——」

なんで鉄骨に頭を下げているのか、自分にもよく解らなかった。でも、自分が悪いと思ったら謝るべきだと、そのとき宗一郎は思った。

ぐぐ。

ぶつかり合う音が唐突に消え、鉄骨がコマ送りのように、ゆつくりと宗一郎の脇をすり抜けて、地上に落ちた。

「ふふ、やった……ね」

言い終えて、携帯電話の上に倒れる天子。

それは重さを感じさせない動きだった。

同時に周りは色を取り戻していく。

時間が動き出したことにより、土煙が上がり、破壊されたアスファルトの破片が飛ぶ。

宗一郎の頬や手足に少しばかり痛みが走るが、そんなことは気にもならなかった。

「天子——？」

「八八……神を説得した気分はどうだい？ いやあ——凄かったね

え。あの顔、見たかい？ いや、キミにはあの神自体、見えなかったか」

空を見上げて、思い出したように笑う。

「こんな神、か。ひどいなあ、僕はそんなに変な神だったかい」

そうだ。こいつは変な神様だ。

急に人のお守りに宿って来たかと思ったら、携帯電話を壊しやがって。

しかも勝手に居候いこうになったと思ったら、自分の家のようにくつろいで、お腹が減ったからポテトチップスが食べたいとか、イチゴ・オレを飲みたいとか、あげくの果てにはテレビが見たいとかわがままばかり言い始めて……今朝なんてテレビそのものを消してしまっただ。

「キミ、ちよつといいかい？」

弱々しい声が、宗一郎を我に返す。

「僕の身体を、携帯電話から離してもらえる、かな」

水を掬すくい上げるように、倒れている天子を両手で包み込む。

お守りから離れても、以前のように火花が散ることは無かった。

「やっぱりね……もう、制約は解かれたか。ということは——あら」

僅かに、天子の身体が色を失ってゆく。天子の身体が透け始めた。それに気づいた天子は、自分の手のひらを見つめて肩をすくめる。「どうやら、加護の力を使いすぎたようだね……自分の身体まで維持できないみたい。いやあ、笑っちゃうなあ」

まるで他人事のように笑う。右腕を顔に乗せて両目を隠すと、ふうと一息吐く。

「死んじゃうのかな——」

その言葉に、宗一郎の胸が熱くなる。

天子が死ぬ？

天子がいなくなる？

それは、天子が宿るべき場所に宿る、ということよりも、遥かに

辛いことだった。

死ぬということは、もう二度と会えないということなのだ。

「嘘だろ？」

「さあ——解らない。死ぬとか死なないとか、考えたことなかったよ」

神様が死ぬ、なんて考えられるわけもない。

「まあ……ほら、いろいろ楽しかったよ？ 僕はキミと出会えてよかった。だから僕は悲しくないよ」

宗一郎は、それに聞き覚えがあった。昨日見ていたドラマの最終回にあった、友人が主人公の前で別れを告げるときのセリフだった。

「じゃあ、何でそんな悲しそうな顔をするんだよ」

「おや、本当かい……やだなあ、女の子の泣き顔なんて見るもんじやないよ」

隠していた手が完全に消えていて、天子の顔が露になっていた。

顔は涙でぐしゃぐしゃになっており、瞳は赤く腫れている。

「しかし、キミも酷い顔だなあ。ハハハ」

きつと、凄い顔をしているんだと思う。天子につられて、宗一郎も笑った。

「ハハハハハ」

「ハハハ、ハハ」

笑ううちに、天子の身体はどんどん薄くなっていった。

「ハハハ、ハハ」

そして、宗一郎の笑い声だけが土煙つちけむりの中で木霊していた。

玖 『ハハハ、ハハ』 後編（後書き）

自らの過ちに気づき、頭を下げる宗一郎。

神の怒りは静まるが、守りたかった存在は手の中から消え失せていく。彼女の生きた証し「お守り」を握りしめ、彼はまた一人の夜を送る――

次回『悲しみの一夜』
どうぞ、ご期待あれ。

拾 『哀しみの一夜』

コッチ、コッチ。

その夜、宗一郎はベッドの上で布団を被って丸くなっていた。時計をぼんやりと見つめているが、一秒一秒がとてつもなく早く感じる。

もっと遅くなれ。もっと、考えさせてくれ。

コッチ、コッチ。

秒針は情け容赦なく、規則的に時を刻んでゆく。

天子、天子、天子。頭の中は天子でいっぱいだった。

自分は本当に天子が好きだったんだと、宗一郎は確信する。

我ながら、気づくのが遅かった。

最初はただ気の毒で、捨てられた子犬のようで可愛かったから、とりあえず面倒を見ていた。神様のくせに好奇心こうきしんの塊かたまりで、あれはなに、これはなに、とうるさかった。

そのうるさいヤツはいなくなり、今はとても静かだ。

また、ぽつかりと心に穴が開いたように感じる。

再び、大切な友人を失った。

でも、この気持ちは友人を失くしたときよりも悲しい。

「なんで俺なんか助けたんだ。バカ野郎。こんなバカで友達もいない、どうしようもない俺を助けて死にやがって」

会いたい。

「俺を一人ぼっちにさせやがって——」

また、天子に会いたい。

拾 『哀しみの一夜』（後書き）

慟哭の夜を過ごした宗一郎。

携帯の上で寝息を立てていた、小さな神様はもういない。

昨日までの日は夢か現か、失意の彼を迎えたのは朝の陽射しだった――

次回、最終回『ばわああつぷ』

どうぞ、ご期待あれ。

終 『ばわああつぷ』

宗一郎は、瞼を涙でいっぱいにして朝を迎えた。

寝ている間も泣いていたようで、枕を涙で濡らすという言葉を地で行くような惨状だった。

どうやら、珍しく目覚まし時計の時刻よりも早めに起きてしまったらしい。

あの日と同じように。

チラリ、と脇に置かれた携帯電話を見やる。

あの日、スヤスヤと寝ていた天子。

いつも起きたら、気持ちよさそうに寝ていた天子。

今は、携帯電話の上には誰もいない。

「バカ——」

また、今日から独りだ。

そうだ。友人と喧嘩^{けんか}別れをしてからずっと独りだったじゃないか。それにこれは、元々ただのお守りだったんだ。

宗一郎は自分自身に言い聞かせた。

そう、ただのお守りだったじゃない——か。

しかし、お守りを見るだけで心臓を鷲掴^{わしつか}みにされたような苦しみが湧き上がってくる。

宗一郎は携帯電話を手に取ると、お守りを外した。

「俺は、お前のことが、好きだった。今さらだけど、ごめんな。恥ずかしくて……ずっと言えなかった」

今は寂しい独り言だ。

宗一郎はお守りをベッドに置くと、扉のノブに手をかける。

「ハ、ハハ」

少し、あきれた様な声が背中に投げかけられる。

「いやあ全く——キミは齒の浮くようなセリフをよく言えたものだね。見ておくれよ……ホラ、僕の顔が真っ赤じゃないか」

ゆつくりと、宗一郎は振り返る。

流れるようなピンク色の長髪に、亜麻色の瞳。

そして携帯電話より一回り大きい背丈せたいになっていた。

それがお守りの上で、照れくさそうに頭を掻いていた。

宗一郎は、それが天子だとすぐに解った。

「天子——？」

「また、会えたね……ソウイチロウ」

照れくさそうに、頬を掻く天子。

「なんで……」

「ソウイチロウが、僕のことを信仰——想っていてくれたからさ」

天子は、ゆつくりと語り始めた。

信仰は神を想う心ということ、加護かこの力は信仰心しんこうしんから生まれること。

広く知られた神ならば、自然と信仰心は高められ、加護の力は強大となる。

しかし、生まれたばかりの天子を知っている人間は宗一郎しかいなかった。だから、加護の力はとても弱いものであり、鉄骨が落ちてきたときに、加護の力を使い果たしてしまったという。

しかし、天子が消えてからも、信仰心は途絶とだえることはなかった。むしろ、強まったという。

「暗闇の中で、ずっとキミの心を感じたよ。その、好きだとか、会いたい、とか」

宗一郎の顔が沸騰ふっとうしたやかんののように、熱を帯びる。

天子は続けた。

「それでね、その信仰心のおかげで僕の神階を上げてもらえることになったんだ。だから僕が持つ加護の力は、より強いものとなってまたココに戻ってこれたんだ」

お守りからふわり、と浮かび上がり、宗一郎の目の前に近づく。

それは息がかかるような距離だった。

「それに、もうお守りの制約は受けないんだ。だから、お守りから

離れてもよくなったんだ」

じゃあ——もう、ここにいらなくてもいいんだな。

そんな言葉が出そうになる。

その前に、天子は少し照れくさそうに、宗一郎に告げた。

「でも……今度は、キミに宿っちゃったみたい——なんだ」

時が止まったように感じた。

「天子が、俺に？」

思わず聞き返してしまう。

恥ずかしそうに、天子は頷く。

「ソウイチロウの心がね、空っぽになってたんだ。このままじゃ、ソウイチロウは人間としては生きていけなくなりそうだった」

「だから……？」

「うん。ただし、今度はソウイチロウから離れられなくなっちゃったけど……あ、違うんだ！ これは決してその、離れたくないっていう訳じゃないんだよ。離れ、られないんだからね」

いやだなあ、もう……。手をパタパタと振り、火照る身体を冷やそうとする天子。

「じゃあ、さ。これから——ずっと、一緒にいられるのか？」

「当然じゃないか。もう、ずっと一緒なんだよ。離れられ——ないんだからね」

てへへ、えへへ。

天子と宗一郎は互いの顔を見合わせ、笑った。

天子を見つめて、宗一郎は確信した。

自分にはこいつがいないと駄目なんだ。

と、天子の後ろにある時計が視界に入る。そして宗一郎の顔がみるみる青ざめていく。

目覚まし時計のアラームがセットされていなかったようで、短針は既に八時を指していた。遅刻は確実である。

「うわ、やばい遅刻する！ ていうか遅刻確定だよ！！」

「なんだって。それはまずい……ソウイチロウ、足を出してくれ。」

隼^{はやぶさ}よりも速くなるように、僕のばわああつぷした加護の力をかけてあげるよ」

「やめろ！ 俺の脚だけが先に学校へ着いてそうだから——おわ、テレビが二台ある！？ 昨日の占いで、今日へ送られたテレビか！

邪魔くさい！！」

勢い良く家を飛び出していく宗一郎。

こんなに騒がしく登校するのは、初めてだ。

天子に出会う前は、本当に何もかもが冷めていた。

何も感じずに、全てがどうでもいいと思っていた。

だが、今は少し違うような気がした。

心に暖かいものを感じる。

これは、自分の胸に宿る、天子の温もりなのだろうか。

宗一郎は、駅へと駆けていく。

天子と、共に。

終 『ばわああつぷ』（後書き）

天子と宗一郎。二人の笑いあう未来を書き終えた、作り手『虎太郎』。

「漫画のネームとゲームシナリオと、投稿用のスケジュールがかつ

かつた……息抜きがしたい」
彼が思いついたのは、既に書き終えた『おまもりやどり』のあとがきを書くことだった――

次回『あとがき』

どうぞ、ご期待――しなくてもいいです。

『あとがき』

この度は『おまもりやどり』をご愛読していただき、ありがとうございます。
御座います。

小さな神様が起こしたお話、如何でしたでしょうか？

読んでいただいたみなさまが、ほっこりと和み、本作を読んだことで、まだまだ明るい未来があるのだ、と知ってもらうために作りました。

人生で初めて、読者を意識して書いた作品です。

・作られた経緯

この作品は『15000文字程度』という決まりの中で作られたものです。

展開等、ライトノベルとしてはかつてないほどの短さで、うまく纏める必要があり、大変苦労した覚えがあります。

しかし、天子の魅力もあってか、無事に優秀作品の枠に入ることが出来ました。

下手な小細工はなしにして、愚直なほどの、王道的な展開。それが好評でした。

・天子

この国、日本に生まれながらにして、古より我が国を守ってくださっている、神様たち。

聞けば堅苦しいですが、そんな神様たちをポップに、より親しみやすくしたいと思いながら書いた結果、可愛らしい神様が生まれましました。

今にして思えば、親しみやすいというか、目が離せないというか……。

・何故、天子がピンク色の髪になったのか

本作を書き終えた後、私はY先生に誤字脱字などを見てもらいました。

すると「そういえばさ。虎太郎君さ、天子は『ばわあっぷ』しただけ、外観的には何も変わらないの?」と言われました。「うーんとですね」と返答に困っている

「髪の色変えたら?」と言われ、「なるほど。じゃあ、そうしてみます」と、私も作りこみの甘さを実感しました。

そのため、『身長がちょっぴり大きくなった』のと『髪の色が変化した』という変化をつけました。

ですが、他の先輩達に見せた中で「生まれ変わって髪がピンクになる理由が解りません。これ、必要ですか?」

と指摘されました。「まあ、遊び要素として……ばわあっぷし」という証明として……」なんて濁しとききました。

すると、そのやり取りを聞いていたY先生が「そうだね。何で、髪をピンクにしたの?」と口を挟まれました。

「せんせーが言ったんでしょ! 『ばわあっぷ』したことを解りやすくするために、髪の色変えたら、とか!」

という、コントみたいなやりとりで生まれたものでした。

意外と、ピンクに巫女服って合うんですよ……?

・似てるアニメ

この作品を書いた後に「夏目友人帳を見たか？」と友人に言われました。聞けば、おまもりやどりと設定が似ているなどで「いつかい見てみる！」と急かされます。詳しく聞いてみた感じだと、私のほうが異端というか、神様らしくないというか……。機会があれば、見てみたいと思っています。

・タグの「おっさんが三人泣いた」の真相

このサイトに掲載する前に、数十人の人に見てもらいましたが、中でも極めつけは四十を越えた三人のおじさんから「ほろりときた」「王道すぎて泣いた」と言われたことです。なんてコメントすればいいのか、困りました。

泣いたというのも、おっさんからすれば、ライトノベルを見たことが無いので、その反動もあつてのことなのでしょう。

・今後について

本編はこれで終わりとなります。

あとがきを掲載した翌日より、執筆済みの番外編『ヘップバーン』及び『できること、できないこと』を掲載していきます。

予約掲載となるため、毎日十八時ぴったりに、更新します。

引き続き、天子と宗一郎の物語をお楽しみください。

『おまもりやどり』本編を連載している間、たくさん感想をいただき、本当にありがとう御座いました。一人一人の声を目にすることができ、また返信することが、いつの間にか私の生活のうちのー

つとなっていました。

こういうことが、作家になるにあたり大切なのだな、と感じました。

そのほかにも感想、レビューなどいただけると、今後の執筆の励みになります。

お気軽に感想などお送り下さいませ、お待ちしております。

それでは、失礼します。

虎太郎でした。

（「・ω・」ガオー

ヘッバーン？

八月も中盤に差し掛かり、外ではセミが近所迷惑級の騒音を発していた。

夜の街に現れる暴走族よりも、今はセミを検挙して欲しい、と宗一郎は考えていた。

そして、部屋の中ではふわふわと視界のあちらこちらで、何かが浮いていた。

と、整頓された本棚の横を、半透明の猫の生首が横切る。

生首の根元はこのぼりのしっぱのように、ひらひらと青白い尾を引いていた。

机の上では猫じゃらしのようなものが、終始のた打ち回っていた。おそらく犬のしっぱだろうと、宗一郎は冷静に考える。

その他もろもろ、似たり寄ったりのものが無音で、宗一郎の部屋を縦横無尽に泳いでいるのだ。

生首だけの猫が大きなあくびをする。

またあいつの仕業か。

そのまま猫を目で追うと、空中に浮いているちいさな女の子がいた。

ピンク色の長髪に巫女装束。身長は十センチといったところか。

宙吊りの状態で、手足は水の上に浮く水死体のように力なく垂れ下がっている。

ずんずんと宙吊りの巫女服へ近づく。

「おいこら天子」

むんず、と着物の襟を掴むと小刻みに揺さぶった。

んあんあと悲鳴を漏らして、それ——天子は目を覚ます。

「やあ……ごきげんようソウイチロウ。朝っぱらからどうしたんだい」

瞼を擦り、天子はなんとか起床した。

「ごきげんよう天子……で、一体あれは何だ」

気持ち良さそうに遊泳している生首を指さす。

「猫だねえ」

「確かに——見まごう事なき猫の首だ。じゃあ、あれはなんだ」
机の上の、活きのいいしっぽに指を向ける。

「犬だねえ」

「確かに——どこからどう見ても犬のしっぽだ。しかし、だ」
たつぷりと間を空けてから、天子に問い詰める。

「こいつらは一体何なんだ」

ううんと唸り、天子は小さな口で大あくびをする。

「起きてすぐに質問かい……？　ちょっと一息つかせてくれないかな」

ヘップバーン？（後書き）

小さな神様が戻ってきて、数週間。

全ての出来事がいい思い出となるという矢先、宗一郎を日常を脅かしたのは謎の浮遊体たちだった。

しかたなく、宗一郎は問うことにした。

浮遊体と一緒にあって、部屋をただよう神様の天子に――

次回『ヘップバーン？』

どうぞ、ご期待あれっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990y/>

おももりやどり

2011年12月2日18時56分発行